

初代教会はローマ帝国の皇帝たちから絶え間ない迫害によって、肉体的にも精神的にも疲弊し、深刻な信仰上の危機に直面していました。このような状況に対して、信仰者たちは互いに励ましあいつつ、苦難がむしろ心を耕し、神と他者への理解を深めていく肯定的な働きをもたらすものだと考えたのです。

このような迫害に対する信仰者の姿勢と態度を表したものとして、ペトロの手紙第一の手紙の著者の代表的な言葉が5章8〜10節にあります。

「身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。信仰にしっかりと踏みとどまって、悪魔に抵抗しなさい。あなたがたと信仰を同じくする兄弟たちも、この世で同じ苦しみに遭っているのです。……神御自身がしばらくの間苦しんだあなたがたを完全な者とし、強め、力づけ、揺らぐことのないようにしてください」。10節の「完全な者とする」(カタリゾー)

という言葉は、「破れたものを修復する」というのが本来の意味です。

神は、苦難を忍耐しつつ受け止めて生きる者を、その苦しみを通して逆に強めて、ふさわしい姿に修復するように造り変えるというのです。このように苦難を肯定的に受け止め、積極的な生き方を見出す人のことを、「夜と霧」の著者であるヴィクトール・フランクルはホモサピエンスになぞらえて「ホモ・パティエンス」(Homo patience)と言いました。日本語では「受苦的な人間」と訳されます。この言葉は、ただ単に苦難を受け止める人間という意味ではなくて、苦難に生きる意味を見出していく力を持った人間のことを「ホモ・パティエンス」といったのです。

さて、ここで信仰者に苦難をもたらす迫害者のことを、ペトロの手紙第一の著者は、悪魔がほえたけるライオンのようにキリスト者たちを食い尽くそうとしているという表現で語っています。ここで言うところの悪魔は、当時のキリスト者を取り巻く人間と社会からの弾圧や庄迫を擬人化した表現です。信仰者といえども人間ですから、地域共同体の中の密接な人間関係の網の目の中で経済活動をしなければ生活は成り立ちません。

同じことは教会内部でも起こります。大迫害の痕跡は教会内部に深刻な分裂とわだかまりをもたらしました。かつての信仰の仲間が裏切った後、その仲間を赦すことは難しい信仰的な課題でした。信仰が逆に生きる力をそいでいく現実にも直面したのです。

こういう状況の中で、ペトロの手紙第一の著者は、苦難を神の摂理とは関係なく突然襲ってきた試練であるかのように、受け止めるべきではないと言っています。そのような認識では自分自身が現実世界に翻弄されてしまうからです。

4章12〜13節を読んで見ましょう。「愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜ばなさい」と言い切ります。これは試練や苦難が信仰者の人生と矛盾するものではないことを指摘した言葉です。逆に、キリストの十字架の苦難に倣うかたちで、苦難を積極的に担うことを通して、苦難のなかにある喜びに目覚めるように促します。苦難や悲しみに直面したとき、それを己が身の不幸というところで思考を止めないことがキリスト者には求められているという事です。

私たちが予測しない事態に襲われたとき、それら苦難や悲嘆という処しがたい事態を持て余してしま

います。自分で消化することも、自分のものとして取り込むこともできず、自らの力で対処できない塊(かたまり)に手を焼いてしまいます。それは自分が背負いきれないものが襲いかかってきているような実感かもしれません。いきおい、それら苦難を己が身の上の不幸と結びつけて、しかも、そのところで思考が止まってしまいがちになるのです。

ペトロの手紙第一3章13〜22節をみてみましょう。全体として特に苦難の中にあるキリスト者を励ますために、「正しいことのために苦しむ」ことの意味を明らかにしようとしています。苦難が神の意思であるならば、善い行いのために苦しむ方が良いと言い切るのです。このようにみてみると、ペトロの手紙第一の著者が勧めていることは、迫害に遭って苦難に直面しても、その虐げの行為に逆らわず、苦難自体が神の御心であるのだから、黙ってそれに従えと主張しているように見えます。

しかし、そのような勧めがなされるのは、この勧めを聞いているキリスト者の間に、「なぜ、この私にこんな不幸が襲いかかるのですか」「私は苦難を引き起こすような悪い行いを何もしていません」という訴えがあったからです。おそらく、自分の苦しみで心がいっぱいになっている人がいたのでしよう。自分の苦しい思いをどうすることもできず、「なぜですか」と神に反問している信者がそこにはいたのです。

それに対して、著者は18節で「キリストもまたひとたび罪のために苦しみましたからである。正しい者が不正な者のために苦しみましたのであるが、それはあなたがたを神のみもとに導くためであった」というのです。この言葉は次のような意味です。キリストの苦しみにおいて、すべての人間の苦しみが同時に苦しまれているというのです。キリストの十字架において、すべての人間の苦しみをキリストが担っておられるというのです。体の一部が苦しめば、体全体が苦しむように、キリスト者の苦しみは、キリストの十字架が媒介となって、他者の苦しみに覚醒する通路になっているというのです。実に、自分の苦難や悲しみには、他者の苦しみが含まれているのです。自分の苦しみにおいて、他者の苦しみが現れている。

他者の苦難を自分が担うところから、実は他者を愛する営みがはじまるのです。そのとき、自分の苦難が喜びに変わり、悲しみから希望が生まれるのです。

フランクルのいうホモ・パティエンスⅡ受苦的な人間とは、絶望の中で自分自身を回復していくということです。フランクルはユダヤ人であったために37歳の時にナチスの強制収容所に収監され、妻はガス室で殺され、いつ自分も殺されるかわからない過酷な状況の中で、実存分析という精神療法を実践し、人間の持つ可能性を信じて生き残った人物です。ホモ・パティエンスとしての人間は成功を追い求める人間として、物事を考え、生きています。成功を追い求めなくても、平穩に幸せに生きていたいと思っています。しかし、そのような生き方は、苦悩や絶望に陥ったとき、思考回路が停止してしまう。苦悩することや絶望することはホモ・パティエンスとしては失敗した人間であり、失敗した人生となってしまふからです。

フランクルたちは強制収容所の過酷な体験の中で、一日の食事が黒パン一切れと、水のようなスープ1杯で労働に駆り出されていました。働けなくなると、そのままガス室行きになってしまう極限状況の中で、自分が生き残るために他人の食事を奪う人が現れた一方で、他人のために自分の食べ物を分け与える人もいたのです。興味深いことに、自分が生き延びるために他人の食事を横取りするような人よりも、他人のために自分の食べ物を分け与えるの方が生き延びたのです。

フランクルはこのような現象を捉えて、人間が生きる目的をしっかりと持った人間が生き延びることを明らかにしたのでした。フランクルは「人間、誰しもアウシュヴィッツ(Ⅱ苦悩、悲嘆)を持っている、しかし、あなたが人生に失望しても、人生はあなたに絶望していない。あなたを待っている誰かや何かがある限り、あなたは生き延びることができるし、自己実現できる」という言葉を残しています。

苦しみを受け止める人間として苦難や悲しみに意味を見出す人生を歩み通したいものです。